

第三章 夕霧の物語 幼恋の物語

[第一段 夕霧、雲井雁に手紙を書く]

むつかしき方々めぐりたまふ御供に歩いて(それぞれに事情のある方々を御見舞い廻りなさる殿の御供に付いて歩いて)、中将は、なま心やましよう(自分なりに気懸かりの)、書かまほしき文など(藤原の二姫に書いて送りたい手紙などが)、日たけぬるを思ひつつ(昼近くになって出し遅れてしまうのを心配しながら)、*姫君の御方に参りたまへり(明石姫のお部屋に伺いなさいました)。*「姫君の御方」は注に<明石の姫君のお部屋。>とある。「姫君」と呼ばれるのは明石姫と対の姫だが、対の姫には中将自身が見舞いに出向く相手ではないし、殿が既に見舞ったし、中将も供に付いていた。だから「ひめぎみのおんかた」と言えば<明石姫の御部屋>になるのだろう。特に注がなくても普通に読めばそういうことだろうと分かる気もするが、確かに改めて指摘されると、この邸や人間関係を生活感を持って実感できない私などは、「姫君」が<明石姫>だということを、どういう感覚で中将が意識していたのかに少なからず戸惑いは感じる。

「まだあなたになむおはします(姫はまだご寢室にいらっしゃいます)。風に懼ぢさせたまひて(昨夜の嵐に怖がりなさって)、今朝はえ起き上がりたまはざりつる(今朝は起き上がりなさることが出来ないでいらっしゃいます)」

と、御乳母ぞ聞こゆる(御乳母が申します)。

「もの騒がしげなりしかば(不穏な嵐でしたから)、宿直も(とのみも、御側で夜明かしも)仕うまつらむと思ひたまへしを(勤め申し上げようかと存じましたが)、宮の(大宮が)、いとも心苦しう思いたりしかばなむ(とても心細がっていらしたものですから、あちらに出向いておりました)。雛の殿は(ひひなのとは、お雛様は)、いかがおはすらむ(どんな様子でいらっしゃいますか)」

と問ひたまへば(と中将がお聞きなされると)、人びと笑ひて(女房たちは笑って)、

「扇の風だに参れば(扇の風でさえ御送り申せば)、いみじきことに思いたるを(たいそうなことにお思いなさるので)、ほとほとしくこそ吹き乱りはべりしか(昨日の嵐はほとほと手に負えぬ荒々しさでしたから、)。この御殿あつかひに(雛様をなだめるのに)、わびにてはべり(手を焼きました)」など語る。

「ことごとしからぬ紙やはべる(有り合わせの紙は在りませんか)。御局の硯(みつぼねのすずり、それと其処の硯を)」

と乞ひたまへば(と中将がお求めになると)、御厨子に(みづしに、女房は書棚に)寄りて(近寄って)、紙一卷(紙の一卷を)、御硯の蓋に取りおろしてたてまつれば(硯の蓋に取り下ろして中将に差し上げると)、

「いな(いや)、これはかたはらいたし(これはかたじけない)」

とのたまへど(と仰ったが)、北の御殿のおぼえを思ふに(姫の実母の北の御部屋様である明石夫人の受領身分を考えると)、すこし*なのめなる心地して(少し気安い気分になって)、文書きたまふ(手紙をお書きなさいます)。 *「なのめ」は「並目」で<並、普通、特別でない>。中将の実母は故葵の上であり、大宮腹の藤原姫であり、地方豪族とは一線を画す、というか、それらの地方勢力を配下に従えた中央貴族の、その中でも最有力の藤原氏の、その中でも源氏の血を引く王家筋に近い、というのが中将の出自だ。受領身分を下に見るのは中将個人の見方ではなく、そういう生活感が実社会だったということを改めて気付かせるという意味で、此处の記事は興味深い。

紫の薄様なりけり(紫色の薄い光沢紙でした)。墨(墨を)、心とめておしすり(丁寧に押し擦って)、筆の先うち見つつ(筆の先を見ながら)、こまやかに書きやすらひたまへる(細かなことにも気を使って書いては休みなさる中将の御姿は)、いとよし(とても素晴らしい)。されど(けれども歌そのものは)、*あやしく*定まりて(妙に型にはまって)、*憎き*口つきこそものしたまへ(気持ちが伝わらない詠み方をなさるものだ、と女房たちは思います)。 *「あやし」は「奇し、怪し」で<不可解だ、変だ>だが、「文し」で<堅苦しい>という意味があるかと思うような語用だ。 *「さだまる」は<決まる、落ち着く>だが<慣例となる、定説となる>ともあって、此处では<型にはまる>ということらしい。 *「にくし」は<くるとましい、いやだ、腹立たしい、見苦しい>などだが<無愛想だ>ともあり、此处では<下手だ←気持ちが伝わらない>としてみた。 *「くちつき」は<口の形>でもあるようだが<ものの言い方、歌の詠み方>ともある。ところで、この文はその場の女房たちの目線で書かれている。女語りであれば同僚意識で、限りなく地文に近い言い方になるのかも知れないが、語り手の評として歌を「憎き口つき」と言ってしまっただけは興醒めかと思う。「~こそものしたまへ」は<よくも~をなさったものです>だが、当事者の弁よりはどこか引いた語感だ。で、あえて<女房たちは思う>と補語する。

「風騒ぎむら雲まがふ夕べにも、忘る間なく忘れぬ君」(和歌 28-04)

「風雲急を告げたとて、片時も君を忘れない」(意識 28-04)

*「むらくも」は<群がる雲>とある、暗雲だろうか。「騒ぐ」「群れる」は大異変が起こる緊迫感であり、平常心ではいられない時を説明する言葉だが、それが政変や人心動乱なら空模様にも例えるのも趣向だが、実際に嵐が来たとあっては唯の見舞い状だ。「忘る間なく忘れぬ君」は<片時も君を忘れない>だろうが、これが面白い言い方なのか、間の抜けた言い方なのか、私には分からない。

吹き乱れたる(嵐に吹き乱れた)*苧萱につけたまへれば(カルカヤの茎に中将がその手紙を結び付けなされると)、人びと(女房たちは)、 *「かるかや」は大辞林に<イネ科の多年草。山野に自生。高さ 1m 内外。葉は線形で細長く、他部とともにまばらに白毛がある。秋、長い芒(ほう)のある穂をつける。ひげ状の堅い根はたわしとする。メガルカヤ。[季]秋。>とあり、また<屋根を葺(ふ)くために刈り取るカヤの通称。メガルカヤ・オガルカヤ・メリケンカルカヤなど。>ともある。カヤブキ屋根のイメージだと、ざっとワラやススキのようなものかと思ったら、幾つかの画像ページに特にオガルカヤの葉がくるくるねじれて絡む様子が掲載されていて、「乱る」の言葉に説得力があった。いや、とすると、カルカヤが乱れているのは昨日の嵐の所為では無いから、「乱る(みだる、だらしなく色めいて打ち解ける)」を言いたいが為、むしろ昨夜の嵐を引き合いに出して「風騒ぎむら雲まがふ夕べ」を<むらむらと欲情した昨夜>という意味で中将は詠んだ、という事になる。嵐は嵐でも、中将にとっての心の波乱は南の上を見掛けてその姿態に刺激されたが、中将の性格では上自身に欲情を向けることは自制され

て、高貴さに対する征服欲は幼馴染みの藤原姫に向けられたらしい。いや、さすがに南の上や対の姫などを話題にするのは幼馴染みの彼女に対してだけでなくでも憚られるだろうが、カルカヤに思いを託した中将の詠みっぷりは実はなかなか凝っていた、という仕掛けの筋立てのようだ。やはり「憎き口つきこそものしたまへ」は作者の引っ掛け、ないし冗句で、長い時を経た今となってはとんだトリッキーな言い回しになってしまった、という事なのかも知れないぞ。それに、此処の注釈には<「まめなれどよき名も立たず刈萱のいざ乱れなむしどろもどろに」(古今六帖六、刈萱、三七八五)を踏まえて、共寝してみたいと詠んで贈った。>とあって、注釈者はこの文脈を百も承知のようだ。全くドチラ様も人が悪い。下敷き歌はカルカヤが屋根の材料である事を踏まえて<役に立つけど有り触れたカルカヤみたいに絡み合って、本気だけどまだ所帯をもてない仮寝でも愛し合いたい>という筋かと思うが、そのまま現代語としても結構分かり易い言い回しに見える。殿の幾人も女を渡る浮気性に比べれば、中将は「まめ(一途)」なのかもしれないが、それは人間関係に基づく生活感での結婚相手としての煩わしさを厭うか愛しむかの違いであり、健康で恵まれた家柄の貴公子が女遊びに事欠く筈はないし、欲情を顕わにする事はむしろ望ましく愛で讃えられるものだったのだろう。

「交野の少将は(色男とされるカタノの少将は)、紙の色にこそととのへはべりけれ(紙の色にこそ添え物を合わせたようですが)」と聞こゆ(と申し上げます)。

「さばかりの色も思ひ分かざりけりや(そんなことにも気が付かなかったな)。*いづこの野辺のほとりの花(何処の野辺に咲く花が良いだろうか)」 *「いづこの野辺」に付いては、注に<引歌があるか、未詳。>とある。紫にゆかりの土地なら武蔵野だろうか。しかし、中将と二姫との間には特に紫の縁は語られていない。ただ、確かに「野辺のほとり」という言い方には何か意味が有りそうな感じだ。もし、中将が歌の意味に気付かない女房たちを皮肉ったとしたら、「野辺のほとり」は<お前たちのような田舎者>くらいになるのかも知れない。例えばだが、そう思うと下の文が分かり易い。

など、かやうの人びとにも(そうした雛様の女房たちにも)、言少なに見えて(言葉少なな態度を示して)、心解くべくももてなさず(気を許しては応対せず)、いと*すくすくしう*気高し(とても素っ気無く気取っています)。 *「すくすくし」は<こわばって硬い→融通が利かない→愛嬌がない>でくまじめだ、実直だ>という風にも見えるのかも知れない。 *「けだかし」は<高貴だ、上品だ>とあるが、此処の文意では<気を許さない様子>だから<気取っている>のだろう。

*またも書いたまうて(中将はこの顛末をさらにもう一通にお書きになって)、馬の助に賜へれば(側近の馬の助にお渡しになると)、をかしき童(馬の助は可愛いお付きの子供や)、またいと馴れたる御隨身などに(またとても親しい護衛官らに)、うちささめきて取らすを(ひそひそ声で耳打ちして申し送ったので)、若き人びと(若い女房たちは)、ただならずゆかしがる(ただならずその内容を知りたがりました)。 *「またも」は<さらにもう一通>だが、これは必須の説明文なのだろう。何しろ中将は「乱る」思いを伝えたくて、折角「吹き乱れたる刈萱につけたまへれば」、女房たちに見咎められた。この歌とこのカルカヤとの意味を女房たちに説明したのでは余りにも品がないし、馬鹿らしくて興醒めだ。だから女房たちの手前、カルカヤは諦めるが、それでは歌の意味が無くなってしまう。だから中将は、女房たちとの事の顛末を認めて、せめて二姫と共に笑い話にして楽しみたかった、に違いない。だから必須である。

[第二段 夕霧、明石姫君を垣間見る]

渡らせたまふとて(雛様が廂前に出て御出でになられるというので)、人びとうちそよめき(女房たちは慌しく)、几帳引き直しなどす(几帳を置き直したりして部屋を整えます)。見つる花の顔どもも(中將は昨夜から今朝にかけて見てきた女たちの顔を)、思ひ比べまほしうて(見比べて見たくなって)、例はものゆかしからぬ心地に(平素は覗き見などしない気性だが)、あながちに(強引に)、妻戸の御簾を引き着て(妻戸の御簾を引き着るように潜り入って)、几帳のほころびより見れば(几帳の隙間から見れば)、もののそばより(雛様が物陰から)、ただはひ渡りたまふほどぞ(ちょうどいざり入って来なさるところが)、ふとうち見えたる(ふと目に入りました)。

人のしげくまがへば(女房が雛の前を頻繁に通るので)、何のあやめも見えぬほどに(着物の柄さえ分らないほどに)、いと心もとなし(とてもじれったい)。*薄色の御衣に(うすいろのおんぞに、紫柄のお召し物に)、髪はまだ丈にははづれたる末の(髪がまだ背丈に届いていないで末が)、引き広げたるやうにて(広がった感じで)、いと細く小さき様体(とても細くて小さな体つきが)、らうたげに心苦し(可愛らしくいたわしい)。*「薄色」は薄紫や青系統の色合いらしいが、「綾目」とあるので織模様の色だとすれば<縦は紫、横は白の織物>と古語辞典にあり、白地に紫柄の着物を想定する。

「*一昨年ばかりは(二年前くらいまでは)、たまさかにもほの見たてまつりしに(偶にちらっとお見掛け申したが)、またこよなく生ひまさりたまふなめりかし(またこのうえなく美しく成長なさったようだ)。まして盛りいかならむ(まして盛りはどれ程になるのだろう)」と思ふ(と中將は思います)。*「おとし」は雛はまだ6歳。中將は13歳。今はそれぞれ8歳と15歳。

「かが見つる先々の(あの見掛けた先程の)、桜(南の上を桜と言い)、山吹といはば(対の姫を山吹と言うなら)、これは藤の花とやいふべからむ(この雛様は藤の花と言うべきだろうか)。木高き木より咲きかかりて(木高い枝から咲きかかって)、風になびきたるにほひは(風になびく美しさは)、かくぞあるかし(こう在って然るべきだ)」と思ひよそへらる(と思ひ比べられます)。

「かかる人びとを(こういう美しい女たちを)、心にまかせて明け暮れ見たてまつらばや(思いのままに毎日拝見したいものだなあ)。さもありぬべきほどながら(そうあっても良い家族の間柄なのに)、隔て隔てのけぎやかなるこそつられ(それぞれが仕切りごとにはっきり分かれていることこそが残念だ)」など思ふに(などと思うと)、まめ心も(中將の真面目な気性も)、なまあくがる心地す(どこか頼りない気がします)。

[第三段 内大臣、大宮を訪う]

祖母宮の(おばみやの、大宮の)御もとにも参りたまへれば(三条邸にも中將が伺いなさると)、のどやかにて御行なひしたまふ(穏やかにお経を上げていらっしゃいます)。よろしき若人など(美形の若女房などは)、ここにもさぶらへど(この邸にも居たが)、もてなしけはひ(物腰や雰囲気)、装束どもも(衣装なども)、盛りなるあたりには似るべくもあらず(今を盛りの源氏大臣邸とは比べ物にならないほど質素です)。容貌よき尼君たちの(顔立ちの良い尼女房たちの)、墨染にやつれたるぞ(喪服で地味にしているのが)、なかなかかかる所につけては(かえってこうした所にあつては)、さるかたにてあはれなりける(それなりに情緒がありました)。

内の大臣も参りたまへるに(日暮れには内大臣も見舞いに参上なさって)、御殿油など参りて(宮は部屋に明かりを用意させて)、のどやかに*御物語など聞こえたまふ(ゆっくりこれまでのお話などを申しなさいます)。 *「おんものがたり」については、注に<内大臣と大宮との会話。夕霧はこの場面にいない。>とある。脱稿が無いとしたら、随分舌足らずな語り口だ。

「姫君を久しく見たてまつらぬがあさましきこと(姫君を随分御会い申しませんのが情け無いことです)」

とて、ただ泣きに泣きたまふ。

「今このごろのほどに参らせむ(近い内に参上させましょう)。心づからもの思はしげにて(姫は自分から物思いがちになって)、口惜しう衰へにてなむはべめる(残念ながら瘦せてしまっています)。女こそ(女の子とは)、よく言はば(言ってしまうえば)、持ちはべるまじきものなりけれ(持つべきではないもののようです)。とあるにつけても(何かにつけて)、心のみなむ尽くされはべりける(心配ばかりさせられます)」

など(などと内大臣は)、なほ心解けず思ひおきたるけしきしてのたまへば(未だに姫の入内を逸したことを許していないような様子で仰るので)、心憂くて(大宮は気が重くて)、切にも聞こえたまはず(中将との仲を頼み申し上げ為されません)。

そのついでにも(内大臣はその話の続きに)、「いと不調なる娘まうけはべりて(またこの度は、ひどく不出来な娘を儲けまして)、もてわづらひはべりぬ(手こずっております)」と、愁へきこえたまひて(愚痴りなさって)、笑ひたまふ(お笑いになります)。

宮、

「いで(それは)、あやし(どういうことでしょう)。女といふ名はして(女である以上)、さがるやうやある(手に負えないことがありますや)」

とのたまへば、

「それなむ見苦しきことになむはべる(それが体裁の悪い話です)。いかで(どういう次第か)、御覽せさせむ(いつかお目に掛けましょう)」

と(と内大臣は)、聞こえたまふとや(お応えなさったとか)。

(2010年5月10日、読了)